

燕と王子

有島武郎

青空文庫

つばめ
燕つばめという鳥は所をさだめず飛びまわる鳥で、暖かい所を見つけ
ておひっこしをいたします。今は日本が暖かいからおもてに出て
ごらんなさい。羽根がむらさきのような黒でお腹なかが白で、のどの
所に赤い首巻きくびまをしておとう様のおめしになる燕尾服えんびふくの後部うしろみ
たような、尾のある雀すずめよりよほど大きな鳥が目まぐるしいほど活
発に飛び回っています。このお話はその燕のお話です。

燕のたくさん住んでいるのはエジプトのナイルという世界中で
いちばん大きな川の岸です——おかあ様に地図を見せておもらい
なさい——そこはしじゅう暖かですけれども、燕も時々
はあきるとみえて群れを作つてひっこしをします。ある時その群

れの一つがヨーロッパに出かけて、ドイツという国を流れている
ライン川のほとりまで参りました。この川はたいそうきれいな川
で西岸には古いお城しろがあつたり葡萄ぶどうの畑があつたりして、川ぞい
にはおりしも夏ですから葦あしが青々とすずしくしげっていました。

燕はおもしろくつてたまりません。まるでみなで鬼ごっこをす
るようになかけちがつたりすりぬけたり葦の間を水に近く日がな三
界遊びくらしましたが、その中一つの燕はおいしげった葦原の中
の一本のやさしい形の葦とたいへんなかがよくつて羽根がつかれ
ると、そのなよなよとした茎くき先にとまってうれしそうにブラン
コをしたり、葦とお話をしたりして日を過ごしていました。

そのうちに長い夏もやがて末になって、葡萄の果みも紫むらさき水すいし

晶ようのようになり、落ちて地よにくさったのが、あまいかおりを風
に送るようになりますと、村のむすめたちがたくさん出て来てか
ごにそれを摘つみ集めます。摘み集めながらうたう歌がおもしろい
ので、燕たちもうたいつれながら葡萄摘みの袖そでの下だの頭巾ずきんの上
だのを飛びかけて遊びました。しかしやがて葡萄の収と穫りも済
みますと、もう冬ごもりのしたくです。朝ごとに河面は霧きりが濃こ
なつてうす寒くさえ思われる時節となりましたので、気の早いひ
人とりの燕がもう帰ろうと言いだすと、他のもそうだと言うのでそろ
そろ南に向かつて旅立ちを始めました。

ただやさしい形の葦わとなかのよくなつた燕は帰ろうとはいし
ません。朋ほうばい輩ばいがさそつてもいさめても、まだ帰らないのだとだ

だをこねてとうとうひとりぼっちになつてしまいました。そんなるとたよりにするものは形のいい一本の葦ばかりであります。あの時その燕は二人ふたりつきりでお話をしようとして葦の所に行つて穂ほの出した葦先にとまりますと、かわいそうに枯かれかけていた葦はぼつきり折れて穂先が垂たれてしまいました。燕はおどろいていたわりながら、

「葦さん、ぼくは大変な事をしたねえ、いたいだろう」

と申しますと葦は悲しそうに、

「それはすこしはいたうございます」

と答えます。燕は葦がかわいそうですからなぐさめて、

「だっていいや、ぼくは葦さんといっしょに冬までいるから」

すると葦が風の助けで首をふりながら、

「それはいけません、あなたはまだ霜しもというやつを見ないんですか。それはおそろしいしらがの爺じいで、あなたのようなやさしいきれいな鳥は手もなく取って殺します。早く暖かい国に帰ってください、それでないと私はなお悲しい思いをしますから。私は今年ことしはこのままで黄色く枯れてしまいますけれども、来年あなたの来る時分にはまたわかくなってきれいになってあなたとお友だちになりましょう。あなたが今年死ぬと来年は私一人つきりでさびしゅうございますから」

ともつともな事を親切に言ってくれたので、燕もとうとう納なつと得くして残りおしさはやまやまですけれども見かえり見かえり南

を向いて心細いひとり旅をする事になりました。

秋の空は高く晴れて西からふく風がひやひやと膚身はだみにこたえま

す。今日きょうはある百ひやく姓しやうの軒下のきした、明日あすは木陰こかげにくち果てた水車

の上というようにどこことという事もなく宿を定めて南へ南へとかけ
りましたけれども、容易に暖かい所には出ず、気候は一日一日と
寒くなつて、大すきな葦の言つた事がいまさらに身にしみました。
葦と別れてから幾いくにち日めでしたろう。ある寒い夕方野こえ山こえ
ようやく一つの古い町にたどり着いて、さてどこを一夜のやどり
としたものかと考えましたが思わしい所もありませんので、日は
くれるししかたがないから夕日を受けて金色に光つた高い王子の
立像の肩かたさき先に羽を休める事にしました。

王子の像は石だたみのしかれた往来の四つかどに立っています。さわやかにもたげた頭からは黄金の髪が肩まで垂れて左の手を帯はかせ刀のつかに置いて屹としたすがたで町を見下しています。たいへんやさしい王子であったのが、まだ年のわかいうちに病気でなくなられたので、王様と皇后がたいそう悲しまれて青銅の上に金の延べ板をかぶせてその立像を造り記念のために町の目ぬきの所にそれをお立てになったのでした。

燕はこのわかいらりしい王子の肩に羽をすくめてうす寒い一夜を過ぎ、翌日町中をつつむ霧がやや晴れて朝日がうらうらと東に登ろうとするころ旅立ちの用意をしていますと、どこかで

「燕、燕」と自分をよぶ声がします。はてなと思つて見回しまし

たがだれも近くにいる様子はないから羽をのばそうとしますと、また同じように「燕、燕」とよぶものがあります。燕は不思議でたまりません。ふと王子の顔をあおいで見ますと王子はやさしいにこやかな笑み^えを浮か^うべてオパールというとうとい石のひとみで燕をながめておいでになりました。燕はふと身をすりよせて、

「今私をおよびになったのはあなたでございますか」

と聞いてみますと王子はうなずかれて、

「いかにも私だ。実はおまえにすこしたのみたい事があるのでよんだのだが、それをかなえてくれるだろうか」

とおっしゃいます。燕はまだこんなりっぱなからまのあたりお声をかけられた事がないのでほくほく喜びながら、

「それはお安い御用です。なんでもいただきますからごえんりよなくおおせつけてくださいまし」と申し上げました。

王子はしばらく考えておられましたかやがて決心のおももちで、「それではきのどくだが一つたのもう、あすこを見ろ」

と町の西の方をさしながら、

「あすこにきたない一軒^{いっけんだ}立ちの家があつて、たった一つの窓^{まど}が

こつちを向いて開いている。あの窓の中をよく見てごらん。一人

の年老^とつた寡婦^{かふ}がせつせと針^{はりしごと}仕事をしているだろう、あの人は

たよりのない身で毎日ほねをおつて賃仕事をしているのだがたのむ人が少いので時々は御飯も食べないでいるのがここから見える。

私はそれがかわいそうでならないから何かやって助けてやろうと

思うけれども、第一私はここに立つたつきり歩く事ができない。

おまえどうぞ私のからだの中から金をはぎとつてそれをくわえて行つて知れないようにあの窓から投げこんでくれまいか」

とこういうたのみでした。燕は王子のありがたいお志に感じ入りはしましたが、このりっぱな王子から金をはぎ取る事はいかにも進みません。いろいろと躊躇ちゆうちよしてあります。王子はしきりとおせきになります。しかたなく胸むねのあたりの一枚まいをめくり起こしてそれを首尾しゆびよく寡婦かふの窓から投げこみました。寡婦は仕事に身を入れていたのでそれには気がつかず、やがて御飯時にしたくをしようと立ち上がった時、ぴかぴか光る金の延べ板を見つけ出した時の喜びはどんなでしたらう、神様のおめぐみをありがたくお

しいただいてその晩は身になる御飯をいたしたのみでなく、長くとどこおつていたお寺のお布施ふせも済ます事ができまして、涙なみだを流して喜んだのであります。燕も何かたいへんよい事をしたように思つていそいそと王子のお肩にもどつて来て今日の始末きょうまつをちくいち言ごん上じょうにおよびました。

次の朝燕は、今日こそはしたわしいナイル川に一日も早く帰ろうと思つて羽毛うもをつくろつて羽ばたきをいたしますとまた王子がおよびになります。昨日きのうの事があつたので燕は王子をこの上もなによいかたとしたつておりましたから、さつそく御返事をしますと王子のおつしやるには、

「今日はあの東の方にある道のつきあたりに白い馬が荷車を引い

て行く、あすこをごらん。そこに二人の小さな乞食こじきの子が寒むそうに立っているだろう。ああ、二人はもとは家の家来うちの子で、おとうさんもおかあさんもたいへんよいかたであつたが、友だちのざんげん讒言ふちで扶持にはなれて、二、三年病氣をすると二人とも死んでしまったのだ、それであとに残された二人の小児はあんな乞食になつてだれもかまう人がないけれども、もしここに金の延べ金があつたら二人はそれを御殿ごてんに持つて行くともとのとおり御家来にしてくださる約やくそく束がある。おまえきのどくだけれども私のからだからなるべく大きな金をはがしてそれを持つて行つてくれまいか」

燕はこの二人の乞食を見ますときのどくだまらなくなりまし

たから、自分の事はわすれてしまつて王子の肩のあたりからできるだけ大きな金の板をはがして重そうにくわえて飛び出しました。二人の乞食は手をつなぎあつて今日はどうして食おうと困じ果こつています。燕は快活に二人のまわりを二、三度なぐさめるように飛びまわつて、やがて二人の前に金の板を落としますと、二人はびっくりしてそれを拾い上げてしばらくながめていましたが、兄なる少年は思い出したようにそれを取上げて、これさえあれば御殿の勘かんどう当も許されるからと喜んで妹と手をひきつれて御殿の方に走つて行くのを、しつかり見届けた上で、燕はいい事をしたと思つて王子の肩に飛び帰つて来て一部始終の物語をしてあげますと、王子もたいそうお喜びになつてひとかたならず燕の心の親切

なのおほめになりました。

次の日も王子は燕の旅立ちをきのどくだがとお引き留めになつておつしやるには、

「今日は北の方に行つてもらいたい。あの鳥からすの風見かざこみのある屋根の高い家の中に一人の画家がいるはずだ。その人はたいそう腕うでのある人だけれどもだんだんに目が悪くなつて、早く療治りようじをしないとめくらになつて画家を廃はいさねばならなくなるから、どうか金を送つて医者に行けるようにしてやりたい。おまえ今日も一つほねをおつてくれまいか」

そこで燕はまた自分の事はわすれてしまつて、今度は王子の背せのあたりから金をめくつてその方に飛んで行きましたが、画家は

室内なかには火がなくてうす寒いので窓をしめ切って仕事をしていました。金の投げ入れようがありません。しかたなしに風見の鳥に相談しますと、画家は燕が大すきで燕の顔さえ見ると何もかもわすれてしまつて、そればかり見ているからおまえも目につくように窓の回りを飛び回つたらよかろうと教えてくれました。そこで燕は得たりとできるだけしなやかな飛びぶりをしてその窓の前を二、三ぶんあちらこちらに飛びますと、画家はやにわおもてに面をあげて、

「この寒いのに燕が来た」

と言うや否や窓を開いて首をつき出しながら燕の飛び方に見ほれています。燕は得たりかしこしとすきを窺うかがつて例の金の板を部へ

屋やの中に投げこんでしまいました。画家の喜びは何にたとえましよう。天の助けがあるから自分は眼病をなおした上で無類の名画をかいて見せると勇み立って医師の所にかけて行きました。

王子も燕もはるかにこれを見て、今日も一ついい事をしたと清い心をもつて夜のねむりにつきました。

そうこうするうちに気候はだんだんと寒くなってきました。青か銅らかねの王子の肩ではなかなかしのぎがたいほどになりました。し

かし王子は次の日も次の日も今まで長い間見て知っている貧しいしょうじき正しょうじき直しょうじきな人や苦しんでいるえらい人やに自分のからだの金を送りますので、燕はなかなか南に帰るひまがありません。日中は秋とは申しながらさすがに日がぼかぼかとうららかに黄金色の光が

赤いかわらや黄になった木の葉を照らしてあたたかなものですか、燕は王子のおおせのままにあちこちと飛び回って御用をたしていました。そのうちに王子のからだの金はだんだんにすくなくなつてかわいそうにこの間までまばゆいほどに美しかったおすがたが見る影かげもないものになつてしまいました。ある日の夕方王子は静かに燕をかえり見て、

「燕、おまえは親切ものでよくこの寒いのもいとわず働いてくれたが、私にはもう人にやるものがなくなつてしまつてこんなみにくいからだになつたからさぞおまえも私といっしょにいるのがいやになつたらう。もうお帰り、寒くなつたし、ナイル川には美しい夏がおまえを待っているから。この町はもうやがて冬になると

さびしいし、おまえのようなしなやかなきれいな鳥はいたたまれまい。それにしてもおまえのようなよい友だちと別れるのは悲しい」とおっしゃいました。燕はこれを聞いてなんとも言えないこちになりまして、いつそ王子の肩で寒さにごえて死んでしまおうかとも思いながらしおしおとして御返事もしないでいますと、だれか二人王子の像の下にある露台ろだいに腰こしかけてひそひそ話をして

いるものがあります。

王子も燕も気がついて見ますとそこには一人のわかい武士と見み目め美しいおとめとが腰こしをかけていました。二人はもとよりお話を聞くものがあるうとは思いませんので、しきりとたがいに心のありたけを打ち明かしていました。やがて武士が申しますのには、

「二人は早く結婚けっこんしたいのだけれどもたいせつなものがないのでできないのは残念だ。それは私の家では結婚する時にきつと先祖から伝えてきた名玉を結婚の指輪に入れなければできない事になっていきます、ところがだれかがそれをぬすんでしまいましたからどうしても結婚の式をあげることはできません」

おとめはもとよりこの武士がわかいかいけれども勇気があつて強くつてたびたびの戦いで功こうみょう名なてがらをしたのをしたつてどうかその奥おくさんになりたいと思つていたのですから、涙なみだをはらはらと流しながら嘆息たんそくをして、なんのことばの出しようもありません。しまいには二人手を取りあつて泣ないていました。

燕は世の中にはあわれな話もあるものだと思ひながらふと王子

をあおいで見ますと、王子の目からも涙がしきりと流れていました。燕はおどろいてちかぢかとしりよりながら「どうなさいました」と申しますと王子は、

「きのどくな二人だ。かのわかい武士の言う名玉というのは今は私のひとみになっている、二つのオパール的事であるが、王が私の立像を造られようとなされた時、私のひとみに使うほどりつばな玉がどこにもなかったので、たいそう心をいためておいでなさると悪いへつらいずきな家来が、それはおやすい御用でございませと云つてあのわかい武士の父上をおとずれてよもやまの話のまぎれにそつとあの大事な玉をぬすんでしまったのだ。私はもう目が見えなくなつてもいいからどうか私の目からひとみをぬき出し

てあの二人にやってくれ」

とおつしやりながらなお涙をはらはらと流されました。およそ世の中でめくらほどきのどくなものはありません。毎日きれいに照らす日の目も、每晚美しくかがやく月の光も、青いわか葉も紅あかい紅葉も、水の色も空のいろどりも、みんな見えなくなってしまうのです。試みに目をふさいで一日だけがまんができますか、できません。それを年が年じゆう死ぬまでしていなければならぬのだから、ほんとうに思いやるのもあわれなほどでしょう。

王子はありつたけの身のまわりをあわれな人におやりなすつたのみか、今はまた何よりもたいせつな目までつぶそうとなさるのですもの。燕はほとほとなんとお返事をしていいのかわからない

でうつぶいたままでこれもしくしく泣きだしました。

王子はやがて涙をはらって、

「ああこれは私が弱かった。泣くほど自分のものをおしんでそれを人にほどこしたとてなんの役にたつものぞ。心から喜んでほどこしをしてこそ神様のお心にもかなうのだ。昔むかしキリストというおかたは人間のためには十字架じゅうじかの上で身を殺してさえ喜んでいらつしたのではないか。もう私は泣かぬ。さあ早くこの玉を取つてあのわかい武士にやってくれ、さ、早く」

とおせきになります。燕はなお心を定めかねて思いわずらつていますうちに、わかい武士とおとめとは立ち上がつて悲しそうに下を向きながらとぼとぼとお城しろの方に帰って行きます。もう日

がとつぷりとくれて、巢すに帰る鳥が飛び連れてかあかあと夕焼けのした空のあなたに見えています。王子はそれをごらんになるとおしかりになるばかり、燕をせいて早くひとみをぬけとおつしやいます。燕はひくにひかれぬ立場になつて、

「それではしかたがございません、御免ごめんこうむります」

と申しますと、観念して王子の目からひとみをぬいてしまいました。おくれてはなるまいとその二つをくちばしにくわえるが早いか、力をこめて羽ばたきしながら二人のあとを追いかけてきました。王子はもとのとおり町を見下ろした形で立っていられますが、もうなんにも見えるものではありませんかった。

燕がものの四、五町も走つて行つて二人の前にオパールを落と

しますとまずおとめがそれに目をつけて取り上げました。わかい武士は一目見るとおどろいてそれを受け取ってしばらくは無言で見つめていましたが、

「これだ、これだ、この玉だ。ああ私はもう結婚ができる。結婚をして人一倍の忠義ができる。神様のおめぐみ、ありがたいかたじけない。この玉をみつけた上は明日あすにでも御婚ごこんれい礼をしましよ
う」

と喜びがこみ上げて二人とも身をふるわせて神にお礼を申しま
す。

これを見た燕はどんなけっこうなものをもらったよりもうれしく思って、心も軽く羽根も軽く王子のもとに立ちもどってお肩の

上にちよんとすわり、

「ごらんなさい王子様。あの二人の喜びはどうです。おどらないばかりじゃありませんか。ごらんなさい泣いているのだからわらっているのだからわかりません。ごらんなさいあのわかい武士が玉をおしいただいでいるでしょう」

と息もつかずに申しますと、王子は下を向いたままで、

「燕や私はもう目が見えないのだよ」

とおっしゃいました。

さて次の日に二人の御婚礼がありますので、町中の人はこの勇ましいわかい武士とやさしく美しいおとめとをことほごうと思つて朝から往来をうずめて何もかもはなやかな事でありました。家

々の窓からは花輪や国旗やリボンやが風にひるがえつて愉快な音
樂の声で町中がどよめきわたります。燕はちよこなんと王子の肩
にすわつて、今馬車が来たとか今小児が万歳をやっているとか、
美しい着物の坊ぼうさま様が見えたとか、背せいの高い武士が歩いて来ると
か、詩人がお祝いの詩を声ほがらかに読み上げているとか、むす
めの群れがおどりながら現われたとか、およそ町に起こつた事を
一つ一つ手に取るように王子にお話をしてあげました。王子はだ
まったままで下を向いて聞いていらつしやいます。やがて花よめ
花むこが騎馬きばでお寺に乗りつけてたいそうさかなな式がありまし
た。その花むこの雄お々しかつた事、花よめの美しかつた事は燕の
早口でも申しつくせませんでした。

天氣のよい秋びよりは日がくると急に寒くなるものです。さすがににぎやかだった御婚礼が済みますと、町はまたものとおりに静かになつて夜がしだいにふけてきました。燕は目をきよろきよろさせながら羽根を幾度か組み合わせ直して頸をちぢこめてみました、なかなかこらえきれない寒さで寝つかれません。まんじりともしないで東の空がぼうつとうすむらさきになつたころ見ますと屋根の上には一面に白いきらきらしたものが見えています。

燕はおどろいてその由を王子に申しますと、王子もたいそうおどろきになつて、

「それは霜しもというもので——霜と言う声を聞くと燕は葦あしの言つた

事を思い出してぎよつとしました。葦はなんと云つたか覚えていますか——冬の来た証しょうこ 拠だ、まあ自分とした事が自分の事にばかり取りまぎれていておまえの事を思わなかつたのはじつに不埒ふちちであつた。長々御世話になつてありがたかつたがもう私もこの世には用のないからだになつたからナイルの方に一日も早く帰つてくれ。かれこれするうちに冬になるととてもおまえの生命は続かないから」

としみじみおつしやいました。燕はなんでいまさら王子をふりすてて行かれましよう。たとえごごえ死にに死にはするともここひとあし一足も動きませんと殊しゆしやう 勝な事を申しましたが、王子は、
「そんなわからずやを言うものではない。おまえが今年死ねばおことし

まえと私の会えるのは今年限り。今日ナイルに帰ってまた来年おいで。そうすれば来年またここで会えるから」

と事をわけて言い聞かせてくださいました。燕はそれもそうだが、「そんなら王子様来年またお会い申しますから御無事でいらつしやいまし。お目が御不自由で私のいないために、なおさらの御不自由でしょうが、来年はきつとたくさんのお話を持って参りますから」

と燕は泣く泣く南の方へと朝晴れの空を急ぎました。このまめまめしい心よしの友だちがあたたかい南国へ羽をのして行くすがたのなごりも王子は見る事もおできなさらず、おいたわしいお首つむりをお下げなすつたままうすら寒い風の中にひとり立っておいで

した。

さてそのうちに日もたつて冬はようやく寒くなり雪だるまのできる雪がちらちらとふりだしますと、もうクリスマスには間もありません。欲張りもけちんぼうも年寄りも病人もこのころばかりは晴れ晴れとなつて子どもようになりますので、かしげがちの首もまつすぐに、下向きがちの顔も空を見るようになるのがこのごろです。で、往来の人は長々見わすれていた黄金の王子はどうしていられる事かとふりあおぎますと、おどろくまい事かすき通るほど光つてござつた王子はまるで癩らいびよう病びようやみのように真黒まっくろで、目は両方ともひたとつぶれてござらつしやります。

「なんだこのぶざまは、町のまん中にこんなものは置いて置けや

しない」

と一人が申しますと、

「ほんとうだ、クリスマス前にこわしてしまおうじゃないか」と一人がほざきます。

「生きてるうちにこの王子は悪い事をしたにちがいない。それだからこそ死んだあとでこのざまになるんだ」とまた一人がさげます。

「こわせこわせ」

「たたきこわせたたたきこわせ」

という声がやがてあちらからもこちらからも起こって、しまいには一人が石をなげますと一人はかわらをぶつける。とうとう一

かたまりのわかい者がなわとはしごを持って来てなわを王子の頸にかけるとみんなで寄つてたかつてえいえい引っぱつたものですから、さしもに堅固けんこな王子の立像も無惨むざんな事には礎いしずえをはなれてころび落ちてしまいました。

ほんとうにかわいそうな御最期ごさいごです。

かくて王子のからだは一か月ほど地の上に横になつてありましたが、町の人々は相談してああして置いてもなんの役にもたたないからというのでそれをとかして一つの鐘かねを造つてお寺の二階に収める事にしました。

その次の年あの燕がはるばるナイルから来て王子をたずねまわりましたけれども影かげも形もありませんかつた。

しかし今でもこの町に行く人があれば春でも夏でも秋でも冬でもちようど日がくれて仕事^{しごと}が済む時、灯^{とも}がついて夕炊^{ゆうげ}のけむりが家々から立ち上る時、すべてのものが楽しく休むその時にお寺の高い塔^{とう}の上から澄^すんだすずしい鐘の音が聞こえて鬼^{おに}であれ魔^まであれ、悪い者は一^{いっ}刻^{こく}もこの楽しい町にいたたまれないようにひびきわたるそうでありませう。めでたしめでたし。

青空文庫情報

底本：「一房の葡萄」角川文庫、角川書店

1952（昭和27）年3月10日初版発行

1967（昭和42）年5月30日39版発行

1987（昭和62）年11月10日改版32版発行

初出：「婦人の国」1926（大正15）年4月

入力：土屋隆

校正：鈴木厚司

2003年6月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.azora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

燕と王子

有島武郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>